2月4日から始まった北京オリンピックは、日曜日に閉会式を迎えました。S先生が「推しンピック」を作ってくれたので、興味深くオリンピックを見た人も多かったのではないでしょうか？みなさんは、何が一番印象に残りましたか？

昨日のカーリング女子で日本は銀メダルを獲りました。スキップを務めた藤沢選手は「私の投げがどんなに下手くそでも、みんながスイープやラインコールで調整してくれた。チームスポーツのありがたさを感じた」と言っています。ノルディックスキー複合団体・ラージヒルの決勝が2月17日に行われ、渡部暁斗選手ら4人で出場した日本が銅メダルを獲得し、「チームで取るメダルは最高だ」という言葉を残しました。

スキージャンプ・混合団体での高梨選手のお話は先週しました。

一人ひとりの選手が団体戦に強い気持ちで臨んでいるからこそ、その分だけ「責任」を感じます。強い気持ちは間違いなく力になりますが、たとえ結果が伴わなかったとしても、観る側が選手を責めるようなことがあってはいけませんね。

2月15日に開かれたスピードスケート・女子団体パシュート決勝で日本はカナダと対戦して敗れましたが、堂々の銀メダルを獲得し

ました。その試合に高木美帆選手と菜那選手は姉妹で出場しました。

3人の選手が隊列を組み、前に進んでいくパシュートという競技です。残り1周の残り200メートルを切ったところで、最後尾を滑っていた高木菜那選手が転倒し2位でゴールしました。

前回の平昌大会に続く金メダル獲得を目指していただけに、選手たちは試合後、悔しさを口にし、高木菜那選手は泣いていました。レースの直後、妹の美帆選手が転倒した姉の菜那選手の元にかけよると、寄り添うようにそっと抱き寄せました。菜那選手に寄り添ったのは、レースに出場した選手だけではなく、出場メンバーから外れサポートに回っていた押切選手も菜那選手を労っていました。

個人の戦いとは違い仲間との絆が強く感じられる団体戦。

メダルという結果に至らなくとも、多くの人の心を惹きつける魅力はチーム戦だからこそであり、先生はそこにスポーツの魅力を感じます。その他にも女子アイスホッケーの試合には感動させられました。オリンピックが終わって、寂しい気持ちがありますが、パラリンピックは続くので、ぜひまた機会があれば、見てくださいね。